

路上の混沌^{カオス}—マックスウェル・ストリートの変容と 1930 年代アメリカ—

高橋 和雅

本論文は、1930年代のアメリカ合衆国シカゴにおいて「雑多な生活空間」として顕在していたマックスウェル・ストリートに焦点を当て、そこに出入りした人々の日常に迫ろうとしたものである。戦間期シカゴの「生活空間」に関するこれまでの研究は、必ずしも領域的な「空間」を問う方向ではなく、人々が日常を織りなす「生活の場」、すなわち場面や瞬間、人間関係をも含み込むような「生活の場」にフォーカスし、そこでの人々の生活習慣や価値観を読み解くような方向へと発展を遂げてきた。しかし、そこで取り扱われてきたのはあくまで、「宗教の場」における「宗教生活」や「娯楽消費の場」における「消費生活」など、ある志向性を持つ「生活の場」とその志向性に基づく人々の日常であった。そこで本論文は、1930年代にかけて一層多様性を増していた大都市シカゴにおいて生じ得た、多様な人々の雑多な志向性が重なる「場」、すなわち「雑多な生活空間」に焦点を当て、そこでの人々の交錯を描き出すことを試みた。具体的には、移民や黒人など雑多な人々が行き交う「路上マーケット」が設置されていたマックスウェル・ストリートに焦点を当て、1930年代を通してそれらの人々が「雑然」をいかに過ごしたのかということについて検証を進めた。ひいては、ストリートを行き交う人々のその日常の向こうに、1930年代のアメリカの時代性の一端を見出すことができるのか否か、検討を重ねた。

前述の問題意識のもと、路上の人々の日々の生き方に迫るべく、本論文では大きく3つのアプローチを展開した。第1部となる第1章、第2章では、議論の下地として、路上マーケットの空間的特質を把握することに努めた。第1章では、路上マーケットを取り囲むマックスウェル・ストリート周辺居住区が、1920年半ばのわずか数年間で、ユダヤ系居住区から黒人居住区に急変するという事態を明らかにした。そして第2章では、そうした急変の最中にあったからこそ、かえって路上マーケットがユダヤ系と黒人双方の生活空間として成り立っていったこと、ひいてはその境界性の曖昧さから周辺のイタリア系やポーランド系といった移民はもとより、外部の富裕層までも引きつける空間になり得たことを明らかにした。この段階において、マックスウェル・ストリートの路上マーケットは、あらゆる面で「多様な人々が行き交う「雑然とした場」となるに至った。

第2部となる第3章、第4章では、一度目線を外に転じ、「雑然とした場」と化したマックスウェル・ストリートを周辺の地域関係者がどのようにみなしたのかを検討した。第3章では、ウエストサイド歴史協会とマックスウェル・ストリート商人協会という2つの地域組織に焦点をあて、彼らの対応を探った。結果、両者は路上の「混乱」に巻き込まれないよう、それぞれ独自の理想を描いて「地域コミュニティ」を志向し始めていたことが明らかになった。第4章では、マックスウェル・ストリートに拠点を置くセツルメント施設であったニューベリー・アヴェニュー・センターに焦点を当て、同センターの福祉活動を検証した。同センターは先の地域組織とはまた異なり、路上の「混乱」の核心を見極め手を差し伸べようとする、といった方法でマックスウェル・ストリートの変化に対応しようとした。このように周辺の地域関係者、地域組織を検討することを通して、いかに前述の路上マーケットが外からは「無秩序な混沌」と見えていたのかが明確になった。

そのうえで、第3部となる第5章では、周囲のまなざしとはまるで異なる位相で生を営んでいた、路上マーケットの人々の姿に迫った。ここでは第一に、路上の売り買いや荷車行商を囲むやり取りに着目

することで、路上マーケットを行き交う人々が、その場限りの刹那的な「接触」を日課としていたことを明らかにした。そして、そうした「接触」を前提としつつ、呼び売りや物乞い、路上集会や大道芸といった多彩な「生」をくり広げていた路上の人々の姿を追うことで、人々の間で交わされていた「生の活力」について考察した。すなわち、それは「無秩序な混沌」として片づけられるべきものではなく、雑多な人々にとって必要不可欠な日常領域の「混沌（カオス）」だったのではないか。そしてその「混沌（カオス）」は、大不況の影響が広がるなか、常に秩序と安定を希求していたように見えるアメリカ社会において、実は同時に必要とされていたものだったのではないか。最終的にそう方向づけることで、本論文では、課題とした 1930 年代アメリカの時代性の一端について、1 つの結論を見出すに至った。